

原 著

## 花 粉 学 講 話 II

II (No. 10—17)

上野実朗\*

Souvenirs palynologiques

II (No. 10—17)

Jitsuro UENO\*

(受付：1981年10月31日)

10 第1回日本花粉学会集会 1<sup>st</sup> Meeting of the Palynological Society of Japan (1961・×・14, Tokyo)

日本花粉学会第1回集会在東京教育大学茗溪会館で行った折の記念の寄せ書がある。今は亡き久内先生はじめ、文部省の百瀬静男氏、神保忠男博士の名も見える。郵便はがきが5円だった頃、何枚かのはがきに寄せ書をして記念にした1枚である。

11 メタセコイアの思い出 Souvenir of *Metasequoia*

私がメタセコイアの報告に接した最初は1941(昭和16)年の三木茂博士の英文報告 *Jap. Journ. Bot* 11であった。その頃、三木博士は京都帝大理学部植物生態学講師で私は副手であった。この出版物は第二次世界大戦が始まる直前、アメリカへの最後の邦人引揚船(氷川丸?)に積まれてアメリカの大学へ送られた。その1冊はハーバード大学のMerill博士の手にいった。彼の門下生で森林植物に造詣の深い胡先驥H.H.Hu博士も一読していた。これがメタセコイアにとって幸であった。

1945(昭和20)年に重慶の王戦(林務官)が揚子江南の支流・磨刀溪で偶然に不思議な針葉林の巨木を発見した。この木は祠の神木として保存されていた。高さ35メートル、直径2.3メートルであった。林学者もみたことのない木として、北京の静生生物研究所長Fan Memorial Institute of Biologyの胡博士の検定をうけた。博士は一見して、メタセコイアと同定した。胡博士は直ちに恩師Merrill博士に急報した。東亜にこんな裸子植物が未知のまま残されていたことに驚いたMerrill博士は早速に標本と種子の採集を胡博士に依頼し、資金を送った。胡博士は鄭万鈞P.C.Cheng博士を隊長とするメタセコイア探険隊を組織し、1947(昭和22)年9月から3カ月間調査をした。協力者は曲仲湘K.L.Chuであった。その結果、湖北省利川県に野生地を発見し、多くの生きた種子を入手した。この種子は1948(昭和23)年1月にアメリカに到着し、見事に発芽した。

同じ頃、胡博士と親交のあったカリフォルニア大学教授兼カーネギー研究所々員で学士院会員でもあったR.W.Chaney博士もメタセコイア探険を計画し

\* 静岡大学名誉教授 〒420 静岡市瀬名189

Emiritus Professor of Shizuoka University, Sena 189 Shizuoka, 420 Japan

た。Chaney (チエネーともシエネーとも呼ぶ) 博士は1948(昭和23)年3月に空路4日にして重慶に到着し、馬やカゴを利用して約2週間かかって四川省万県の南、揚子江支流の磨刀溪の上流で、湖北省との境のすぐ北部に到着し、調査、採集を行った。Chaney博士は何度も来日し、その度に私は下手な英語で通訳をした。博士は飛行機での4日より馬での2週間が余程こたえたらしかった。若い頃は頑健な博士はグランドキャニオンを1日で降りたのが自慢であった。しかし来日中、還歴(60歳)を迎えた日に大阪でお祝をしたが、ブタクサの花粉症に悩まされ、また食後は30分位ぐっすりと昼寝をした。三木茂著メタセコイア(1953)の第4図にChaney博士と芦田譲治京大名誉教授と私と3人でメタセコイアを囲んでいる写真がよい思い出である。

日本人が化石で命名し、中国人が植物を発見し、米人が採集し育てて日本へ里帰りしたメタセコイアは戦後の明るいニュースのひとつであったし、三木教授の下で助教授としてその一助ができたのは幸であった。

## 12 メタセコイアの呼称、Name of *Metasequoia*

三木茂博士によるとセコイアと呼ばれていた化石の中で少し変わっていた植物に、メタというギリシャ語の「後」をつけて、メタセコイアとして1941(昭和16)年に命名した。そして日本のメタセコイア化石には、*Metasequoia disticha* Miki(イチキヒノキ)と*Metasequoia japonika* Miki(コイチキヒノキ)とがある。

しかしこの化石をメタセコイアタイプ Type 標本とするのは困難なので、現生種のタイプ標本は中国で採集したメタセコイアである。今日の学名は *Metasequoia glyptostroboides* Hu et Cheng である。Hu は胡先驥、Cheng は鄭万鈞である。タイプ標本は1947(昭和22)年採集品である。戦後最初の国際植物学会では敗戦国の日本やドイツの出席は許されたが国語は使用できず、メタセコイアの命名者は中国人の胡・鄭両氏となった。しかし花粉分析で研究対

称となるメタセコイア化石花粉は *Metasequoia disticha*, *Metasequoia japonica* であり、北米なら *Metasequoia occidentalis* (Newberry) Chaney である。終戦当時の日本植物学会々長小倉讓(オグラ・ユズル)博士が現生種メタセコイアの学名は *Metasequoia glyptostroboides* Hu et Cheug に決ったと話を京大でされた時、三木博士は「仕方ないよ、僕につけた名前は化石のメタセコイアだからなあ」と一寸淋しそうに言われた事を昨日のこのように覚えている。あの戦争がなく、三木博士が中国で調査し、発見していたら、或いは別の学名がついたかも知れない。

メタセコイアの苗木到着を間近にして、メタセコイア保存会が1949(昭和24)年12月19日に創立された。会長は木原均博士で、顧問には前記のチエネー博士・メリル博士、そして占領軍GHQ天然資源局長スケンク博士、郡場京大名誉教授らであった。三木博士と上野は特別会員兼幹事で、事務局は大阪市北区南扇町の大阪市立大学工学部応用植物研究室であった。

メタセコイアにも日本名をつけたらといわれて、中国名の水杉をそのまま利用しようと考えた。中国では現生種が水分の多い谷間に生育しているので水杉とした。しかし和名でミズスギはすでに用いられており *Lycopodium cernuum* L.(ヒカゲノカズラ科)というシダが水杉と書いている。そこで水杉は不可となった。チエネー博士はセコイアよりメタセコイアが古い特性が多く見られたので Dawn Redwood すなわちアケボノスギという英名をつけた。日本でもアケボノスギを用いようという説もあった。メタセコイア保存会で私はメタセコイアのままで良い日本名になると唱えた。それはセコイアが日本名になっていたからである。そして今日ではメタセコイアが和名の俗称として用いられている。

## 13 日本における最初のメタセコイアの雄花 1<sup>st</sup> mole flower of *Metasequoia* in Japan (1957 April)

私は1950(昭和25)年に日本植物学会45回大会(東

京) でメタセコイアの花粉を報告した。標本はアメリカ・カリフォルニア大学の R. W. Chaney 教授が 1948 年 3 月に Wan Hsien, Szechuan (四川省万県) で採集したものである。当時はメタセコイアの珍らしかった頃である。多くの人から花粉をわけてくれと言われたので困った。私も少ししか持っていなかった。そこで翌年 12 月に、大阪市立大学理工学部紀要 Vol. 2, Series D に Morphology of pollen of *Metasequoia*, *Sciadopitys* and *Taiwania* として印刷発表した。その時の直径頻度があとで色々な花粉分析でスギやセコイアとの区別に用いられた。

Chaney 教授の好意で日本へ里帰りしたメタセコイアの 100 本の苗木の中の 1 本は、京都大学理学部植物園にある。この木は、Chaney 教授が採取した種子から 1949 (昭和 24) 年に実生した株である。日本に到着した苗木は地上部約 20 センチ位で、茶色のピートでつつまれている根はフサフサと元気であった。夜行で東京から京都まで来る間にスチームで若芽が青々とでていた。丁度、元気のよい赤ん坊が大声で叫んでいるようであった。またもう 1 本は京都大学農学部演習林本部苗圃にあるが、その木に雄花らしいのが咲いたのは 1957 (昭和 32) 年 4 月であった。日本で最初に開花したメタセコイアの雄花の写真は拙著「花粉学研究」(1978) 第 66 図版にある。いぢけた花であったが、花粉はほとんどなかった。実生してから 8 年間かかって雄花をつけたことになる。その後は毎年、少しずつ雄花をつけ、花粉も徐々に生産されてきた。つまり花粉は約 10 年かからないと出来ない訳になる。雌花はもっと早くから着いていた。

数年前、誰かが日本で最初のメタセコイアの雄花の話をした。それは誤であった。私の「花粉学研究」が出た後であったので私の写真と比較しながら話をしてくれたらよかったと思った。

#### 14 セコイアとセコイアデンデロンの思い出 *Souvenir of Sequoia and Sequoiadendron*

セコイアはスギ科の大木 2 種である。セコイア

メスギ *Sequoia Sempervirens* Endl.,  $2n=66$  は樹皮も材も赤いので Redwood (赤木) と呼ばれ、北米の太平洋岸にある海岸山岸 Coast Range にある。セコイアオスギ世界爺 *Sequoiadendron gigantea* Buch.,  $2n=22$  はアメリカが世界にほこる大木で、直径 6~10 メートル、高さ 110 メートル、樹齢は 3~4000 年である。セコイアオスギを 36 本つなぐと富士山 3,776 メートルの高さになる。キリスト Jesus Christ が生まれた時は、すでに 2,000 年の大木青年期であり、コロンブス Christopher Columbus がアメリカを発見した 1492 (明応元) 年は壮年樹であった。産地はカリフォルニア州の内陸部、シエラネバダ山脈 Sierra Nevada のヨセミテ国立公園 Yosemite National Park とセコイア国立公園 Sequoia National Park である。幹にトンネルをほり自動車を通れる写真は有名である。米人は Big Tree (巨木) とよぶ。

この木がセコイアと名付けられたのは、白人が調査した時に案内をしたアメリカインディアンがこの木の名前を「偉大なる者」の意味で、アメリカインディアンのチェロキー族 Cherokee の大酋長 See-qua-yah の名をつけたという説がある。

シー・クア・ヤがなまって Sequoia (Sequoiiah) となった。彼はドイツ系アメリカ人とアメリカインディアン娘との間に生まれた混血児で、チェロキー語では混血児を See-qua-yah とよび、これはオポッサム Opossum をさす。オポッサムはアメリカ東南部産の有袋類フクロネズミ・コウモリネズミで、害敵にあうと死んだマネをする。アメリカインディアンにいわすと、白人との混血児は、あまり勇敢でなくて、敵にあうと腰をぬかしたのかも知れない。

しかし、このセコイアは勇敢で、しかもインテリであつたらしい。彼は当時のアメリカインディアンが言葉はあっても文字がなかったので、Cherokee 語に ABC で文字をつくった。この文化的大事業に感謝した人々は彼の名を永久に記念するため、この大木にその名をつけたといわれている。しかし、酋長セコイアの最後は不遇であつたらしく、南方に追われて死んだという。



アメリカインディアンのセコイアは、日本でいうなら源義経であろうか。彼の仕事はアメリカ大陸にヨーロッパから移住した人々の心をうった。とくに若い大学生には人気があり、アメリカの諸々の大学の学生ホールはセコイアホールとよぶ。そしてアメリカ合衆国大統領専用ヨットもセコイア号とよんでいる。

しかしセコイアの名をめぐる英米戦争があった。アメリカ人はこの大木に自国の独立の父ワシントンを記念してワシントンニア *Washingtonia* とよんだ。イギリス人も負けずにオーターローの名将軍ウエリントンを記念して *Wellingtonia* とした。しかし2人ともセコイアにまけた。

セコイアは現在各地に植えられているので花粉は入手しやすい。例えば京都では2月上旬から。セコイアデンドロンで雄花をつけ花粉がとれる木は残念ながら、知らない。私が報告に使用したのはカリフォルニア大学教授 R. W. Chaney 博士がわざわざ私のために、1952 (昭和 27) 年 3 月 10 日に前記のヨセミテ国立公園で採集して送付されたものである。博士は積雪 20 メートルの中を歩き、通常なら 20 メートルの高さの下の枝には仲々手がとどかないのが、雪のおかげで楽にとれたと手紙に書いてあった。博士の温顔と友情を偲びながらこれを記しておく。

インドのラクノー市サニー化石生物研究所 Birbal Sahni Institute of Palaeobotany, Lucknow, INDIA で第 4 回国際花粉学会が行われてが、その廊下にチネエ博士の写真はあった。しかし、ここを訪れ、しかも名誉所員であった三木茂博士の写真はなかった。化石植物の研究では Chaney 博士の方が評価されているらしい。

註 *Sequoia*, *Sequoya*; (c 1760—1843) Cherokee 語の音節文字表を考案したアメリカインディアンの学者の名前。

註 *Opossum* *Americ. Indian.* (Algonquian) *apousum* [1610] 原義 *white beast*. オポッサム科の動物の総称。北米から南米まで分布し、危険になると死んだふりをする習性がある。特にキタオッポサ

ム *Didelphis marsupialis*. (以上の註は研究社・新英和大辞典・第 5 版による)。

註 清水知久; アメリカ・インディアン「発見」からレッド・パワーまで (中公新書 258 昭和 45 年 8 月) この本によるとチエロキーはアメリカの南東部文化圏に属している。テネシー・アラバマ・ジョージアの 3 州付近にいたらしい。

### 15 支那文化論叢 (昭和 16 年訳) Symposium on Chinese Culture (1941)

この本は戦前に太平洋問題調査会 Institute of Pacific Relations が陳衡哲女士に編集をたのみ、女士の努力で第一流の人士の寄稿を集めたものである。内容は 1932 (昭和 7) 年の刊行物であるが、日本語訳は昭和 16 年 5 月 (1941) であった。監修は東京大学文学部東洋史の先輩、石田幹之助氏で、日本語訳は考古学を駒井和愛東大講師 (現、東大名誉教授)、音楽を岸辺成雄大学院生 (現、東大名誉教授)、科学と生物学を上野が分担した。その他、地質学と古生物学を赤堀英三博士 (もと上海自然科学研究所員)、農業を仙波泰雄氏 (満鉄東亜経済調査局) などが参加され、宗教・哲学・文芸・劇・畫・書・建築・産業などにもふれていた。

上野が訳した生物学の原著者は乗志 Ping Chih と胡先驥 Hu Hsien-hsii であった。前著は動物学者で、後者は植物学者である。胡博士は第 11 話に出てくるハーバード大学のメルル教授の高弟の一人で、三木博士のメタセコイアの報告を読んで覚えていた人である。1893 (明治 26) 年江西省新建に生まれ、字は步曾。戦前すでに南京の国立東南大学農学部植物学科主任教授、北京静生生物研究所副所長兼、植物学部主任を歴任し、当時第一流の植物学者であった。

支那文化論叢は生活社から発刊された㊦マル停という停止価格で 5 円 20 銭の 454 ページの本である。私が分担した生物学は pp. 273—298 で、中国の生物学研究所・大学などの所在地・教授や、定期刊行物、主な植物誌・動物誌の紹介がなされている。戦前に訳したこの文献が 40 年たって今日また役に立つとは

思ってもみなかった。メタセコイア・三木・メリル・胡先驥・上野と見えない糸で結ばれている気がする。

石田幹之助は東洋文庫長をされた。東洋の自然科学史にも深い関心をもち、アメリカの Berthold Laufer 博士にも相当する博覧強記の先輩であった。東洋文庫は岩崎家（三菱）が個人で買った東洋関係文献の宝庫である。現在は国会図書館の分館となり、文庫長は私と東大東洋史の同級生の榎一雄・東京大学名誉教授である。石田先輩の先見の明を偲び、この文を記した。

#### 16 クレンプ博士のパリノデータ Palynodata of Dr. G. O. W. Kremp

クレンプ博士はもとドイツの調査所におり、古生代の孢子化石の専門家である。このたび、アリゾナ大学地球科学教室を定年退官した。現在、パリノロジーの文献を世界的に整理し、コンピューターに入れ、石油会社とタイアップして、自宅にパリノロジー・センターを設けた。日本花粉学会に入会される予定である。パリノサーヴェーの徳永重元博士と親交がある。名誉教授になって第2の研究生活を開始されたこのファイトに敬意を表わしたい。

Dr. Gerhard O. W. Kremp (Professor Emeritus)  
101 Avenida Carolina, Tucson, Arizona 85711 Tel.  
(602) 327 - 2979 U. S. A.

#### 17 1934(昭和9)年の日本における空中花粉調査—原初治博士の思い出 Souvenir of Dr. H. J. Hara (Los Angeles, U. S. A.)

戦前の日本における空中花粉調査は、1932(昭和7)年、九州大学の榊原博士によって行われた。その頃、アメリカのロサンゼルス市の耳鼻科開業医師、日系米人の H. J. Hara (初治ジェームス・原) はアメリカでは日系人でも花粉症発生率が白人と同じだと発表し、札幌・東京・神戸の空中花粉採集を友人に依頼して行った。そのプレパラートは京大理学部植物学教室の郡場(コーリバ)教授に送られ、同教授が同定してデータを原氏に報告した。上野が

1939(昭和14)年に花粉研究を郡場教授からすすめられた時に、この記念すべきプレパラートを渡された。今も大切に保存している。

ビルマ出征で中断した私の花粉研究は、1946(昭和21)年に復員して京都大学に帰って、このプレパラートを見て、新しい研究分野のスタートを切った。その最初のニュースは進駐軍の花粉症であった。幾瀬マサ博士らの活躍がはじまった。私はロサンゼルス市の原博士にアドレスも詳しく分らぬまま手紙を書いた。あとで原博士は笑って話をした。ロサンゼルス市、原初治様で届いた手紙はあれが最初で最後までしたと。

原博士は郡場教授の健在を知り京大まで訪ねて来てくれた。郡場先生は空中花粉リポートの御礼にと原博士が送ってこられた、カルフォルニア・オレンジの話がされた。原博士は独学力行の士で、戦後、ロサンゼルス市ローマリンダ医科大学の教授として、また米国耳鼻科医師訪日旅行団の団長として何度か来日された。夫人はアメリカ女性だが同志社大学創立者に深く敬意を払っていた。京都市内を案内した時に、同志社大学前を通りながら、夫人は黙礼されていた。

石崎達博士編の花粉アレルギー(北隆館1979)4ページにも原博士のことを記してある。原博士は私が戦前購入して愛読していた R. P. Wodehouse の Pollen Grains (1935) が戦災で焼失したと知って、新しく1冊を求めて贈ってくれた。大阪市北区西扇町12の大阪市立大学理工学部植物研究室の私あてに大阪税関から、いかめしい書類がとどいた。「贈与小包は連合軍の好意により、あなた宛に救恤品として、日本向発送が認められたものですから、受領の上は他に転売する等右厚意に反することのないように御留意下さい。」私は大阪駅前の郵便局で Customs Declaration(税関告知書)との対照の上で入手できた。1952(昭和27)年の春であった。

1963(昭和38)年に4年に1度の日本医学会総会(第16回)が大阪で開催された。展示委員長の水野祥太郎阪大教授からの依頼でアレルギーの花粉症展

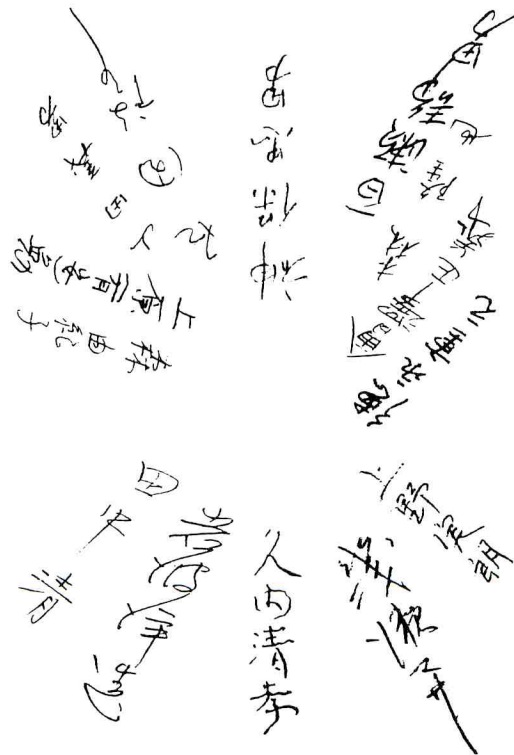
示用パネル3枚を作った。その1枚に原博士の写真と日本における花粉症の植物標本を出した。原博士は温厚な紳士で、前記の Wodehouse やシカゴの Dulhum 博士とも親交があった。今日の日本の空中花

粉研究の成果を御目にかけてたいし、日本花粉学会会誌もお送りしたいと考えている。

参考 図説・医学の進歩 1963年第16回日本医学学会総会 学術展示記録 p. 32 展示番号 57・58・59

### Summary

10 1<sup>st</sup> Meeting of the Palynological Society of Japan (1961×14, Tokyo) . 11 Souvenir of *Metasequoia*. 12 Name of *Metasequoia*. 13 1<sup>st</sup> Male flower of *Metasequoia* in Japan (1957 April) . 14 Souvenir of *Sequoia* and *Sequoiadendron* (See-qua-yah of Cherokee, American Indian). 15 Symposium on Chinese Culture. 16 Palynodata of Dr. G. O. W. Kremp. 17 Souvenir of Dr. H. J. Hara (Los Angeles, U.S.A.).



1st Meeting of the Palynological Society of Japan (1961 Sep. 14, Tokyo)